贋作幽霊暗殺者

tontokaimo39

贋作幽霊暗殺者

「陽子、私のためにわざわざ…ありがとう」
「そうよ、蹴飛ばしてやるためにね」
「だから私も出てきたのよ、はるばる信州の山奥から」
「ハハハ鈴子だな、彼女から長いメールが届いたからおおよそのことはわかったけど、大変だったのね」
「ええ、内では何時正体がばれるか、外ではどこから弾が飛んで来るかなんて毎日、陽子だから本音が言えるのだけど、私少々参りかけていたの」
「当然よ、それで平気でいられる女性って化け物じゃないの、夕子がそんな冷血動物だったら私は貴女と友達になっていなかったわ、で、白馬の騎士が来てくれたのでしょ」
「そう、少々くたびれた騎士だけど」
「彼にも今の本音話したの」

「彼にはね」
「そうよかった、でないと彼だって、貴女から離れてたかもわからないわ」
「みんなが心配してると思うと辛かったわ…ごめん」
「仕方がなかったのだからそれはいいじゃない、夕子のその言葉を聞いただけで、イギリスから帰って来た価値があった、ほら『幽霊何とか』と言う本、友人や知人どころか恋人のことさえ気にならない女性が出てるじゃない、もし夕子がそんな女性だったら本当に蹴飛ばしている」
「そう言って私の気持ちをわかってくれるの、彼と陽子だけ」
「こら、ついでにのろけるな！でもやはり夕子は凄い、五ヶ月もでしょう、私だったら一週間で参ってる、あっそうだ似たような映画なかった？四六時中

命を狙われる女性が登場する、何だったかな？『暗殺者』いや『アサシン』だったっけ」
「そ、そうだ！ア、アサシンだ！俺がアサシンだ！」
「えっ！？」
隣の席で、眠りこけていると思った男が突然立ち上がり、よろよろしながら夕子たちの席に来たのだ。
「おじさん暗殺者なの、まあ怖い」
「でも誰を暗殺するの？」
「あ、あいつだ、決まっている、絶対にやってやる、俺はアサシンだ！」
男はすっかり酔っ払っているのだ。
「おじさん、アサシンと言うより足死んでるのじゃないの、大丈夫？歩けるの？」
「お、俺は酔ってなどいるか、アサシンだからな」
男はフラフラとよろけながら出口に向かった。
「あっお客様、お勘定を」

「か、勘定か、ほら」
「あっ一万円ですね、すぐおつりを」
「つりなぞいらん、そこにいる、ふ、二人のアサシンおばさんへおごりだ」
「もう何よ！おばさんって！」

「原田さん、おはようございます」
「あ、夕子さん、おはようございます、宇野さん、夕子さんが来ましたよ！」
「こら大きな声を出すな、署中に聞こえるじゃないか」
「あら課長さん、おはようございます」
「夕子君おはよう」
「みろ、課長室にまで聞こえたんだ」
と、その時突然一人の男が飛び込んで来た。
「やった！やったぞ！俺はアサシンだ」

「あら、アサシンのおじさん！」
「ねえ夕子さん、朝死んだと言ってるのに彼生きてるじゃないですか？」
「何言ってるの、アサシンと言うのは朝毎新聞の略称、フフ嘘、暗殺者と言う意味よ」
「おい、お前銃を持ってるじゃないか！危ない！よこせ！」
「ああこんなものはもういらない、やったんだ！やったぜ、俺はアサシンだ！」
「やった、やったと言って誰を？」
「あいつだ、あいつに決まってる！」
「あいつじゃわからない、どこで？」
「公園のイチョウの木の下だ、こうして懐中電灯を左手に持ってな、あいつバカだぜ、それがいい標的だ、だからな左胸をぶち抜いてやった！」
「おい！本当か？」

「宇野、念のために」
「ええ」
原田がすぐパトカーを出し私が助手席に座ると、夕子は当然のような顔をして後に乗り込んだ。
「あ、夕子さんもいっしょですか、それなら大丈夫」
「おい、それはどう言う意味だ」
「いや、宇野さんの手に負えない事件でも…」
「余計なことを言ってないで早く車を出せ！公園のイチョウの木だと言ったな、お前知ってるか？」
「このあたりの公園ならわかりますが、イチョウの木と言うのは…そんなものあったですか？」
　所轄の交番によって場所を尋ねた、公園の中でも最も奥まったところで、人目を避けるアベックならともかく、散歩やジョギングの者はまず近寄らないところだと言う、ちょうど川土手のような土手が、園と外部とを分けていたが、なるほどその土手の上

に一本のイチョウが葉を茂らせている。
「原田、すぐ署に連絡だ！」
「あ、はい！」
不法投棄だろう、根元には、割れたビン、陶器、ガラスのかけら等が散乱しているが、そのがらくたの中に一人の男が両手を挙げたままうつ伏せに倒れている、脈を調べるまでもなく、だめなのは人目でわかる状態だ。
私は、そっと持ち上げて見た、
「銃でやられたのは間違いない、まだ血は乾ききっていないから昨夜だな」
「そうね、昨夜と言っても、もう今日のことだと思うわ」
「白衣を着ている、医者かな？右手に握ってるのはなんだ？」
「懐中電灯よ、あら消えてる」

「単純と言えば単純な事件だが…少々やっかいなんだ…」
「どう言うこと？」
「犯人は、『やった、やった』と自分で飛び込んで来たんだから自白したようなものだし、被害者の身元もすぐわかった、ところが動機がわからない…」
「俺はアサシンだと言ってた人ね、あの人何なの？」
「彼は岩井という元刑事だ、それもただの刑事ではない、射撃の腕は抜群で、警察の競技会で何度も優勝している」
「刑事だったの、そんな人がどうして？」
「俺の署のことではないから詳しくはわからないがちょっとした不祥事、まあストーカーのようなことをやって退職になった」

「あら…」
「それほどたいしたことではなくて、普通なら停職何ヶ月で済む程度のことなのだが、どうも異状だった」
「異常って？」
「好きな女性を追いかける気持ちがわからないでもないが、彼が追いかけたのは見ず知らずの女性、彼が好きだった女性はその時すでに病死していた。ところがだ、彼はその病死した女性の名前を呼びながら、まったく知らない女性に迫ったと言う、すでに脳の歯車が狂いかけていたんだろう」
「ふうん…で、被害者の方は？」
「彼はやはり医者だった宇野と言う男だ、ただ開業医にしては珍しくて精神科医、何でも催眠療法とか言って、眠っている患者に話しかけたり話させたりして、虎や馬を出現させる、おい、そんなマジック

あったかな？」
「バカ、それトラウマのことじゃない」
「ハハ、そうとも言う、なんとなく胡散臭いと思って夕子の大学の医学部の教授に聞いたら、正しい治療法だそうだな、精神科医はいつから獣医を兼ねるようになったんだ？」
「恭一、ふざけないの、それギャグにもなってないわよ」
「ハハハ、まじめな話、どうして岩井が医者を撃ったのかがわからない、岩井は支離滅裂なことを言うだけで話そうとしないんだ、今の状態ならいずれ精神鑑定に回され長期の治療を受けることになるだろうが、困ったことに動機がわからないままでは事件が終結したとは言えないんだなあ」
「恭一、単純な事件って言ってるけど、そうかしら…私にはちょっと…」

「うん？」
「ねえ、その宇野と言う医師の家に行ってみない、何かわかるかも」

家は住宅街の外れにあった、開業医の医院によくある診療時刻などを書いた大きな看板はなく、玄関脇に『宇野・精神科クリニック』の表示があるだけだ。
「おい、誰かいるぜ」
「そうね、ドアも開いてる」
「彼は確か一人暮らしだったはずだ」
「入ってみましょ、そっと」
玄関は広かったが、医院にある受付の窓も待合の椅子もなく、普通の民家のそれと変わりない、ただ右手のドアに『治療室』の札がかかっている、人の気配はその部屋の中だ。

さっとドアを開くと、一人の男がギョッとした様子で振り向いた。
「おい、そこで何をしている！」
「あ、あんたは？」
私は、手帳を見せた、
「ここは事件に絡んだところだが、何をしてる？」
「ああ、貸した本がどうなっているかと…」
「貸した本だと？ここの医師は殺されたを知ってるだろう、その葬儀もまだ終わっていないのに」
「ああ、私は宇野の友人だ、医学部時代からな、普段から互いの家を我が家のように出入りしている、今日前を通りかかったものだからついその癖が出て…」
「と言うことはあんたも医者か、それほど親しい友人なら、今度の事件について何か心当たりがあるはずじゃないのか？」

「いや、まったく何も、ただ宇野は精神科だ、あの科の患者にはいろいろなのがいるだろうから…」
「あんたは精神科ではないと？」
「私は外科だ、専門は違っても大学で宇野とは気が合ったものだから」
「なるほど、いくら友人と言っても無断侵入には違いないな、住所と氏名を聞いて置こう」
男は名刺を一枚出すと、そそくさと立ち去った。

「ね、変な男が現れた、事件は単純でないようよ」
「そうだな、山脇か、彼も開業医だった」
「本を探してたって、見え透いた嘘ね」
「ああ、何かを探してたのは間違いないが、引き出しを開けてたんだからな」
私たちは、なじみの喫茶店に腰を落ち着かせていた、
「あの、宇野警部さんですね？」

「そうだが何か？」
「警察署に行ったのですが、担当は宇野警部さんでたぶんここにいらっしゃると、大きな刑事さんが」
「原田だな、で、貴女は？」
あ、申し遅れました、私は国東恭子と申します、宇野医師の元妻、宇野とは三年前に離婚しましたが」
「ほう、で何の用件でしょう？」
「この度の事件、動機がわからないと新聞で読みましたの、それについてお話しておいた方がいいと思いまして」
「そうですか、で？」
「宇野を撃った岩井と言う男ですが、彼は突然現れて『自分の恋人を殺したのはお前だ』と宇野に…」
「ほほう、なぜですか？」
「まったくわかりません、宇野は今までに見たことも無い男だと言っていました。クリニックに押しか

けて来て、『お前の医療ミスで彼女は死んだのだ』と言うのです、『そんな覚えはない、何かの間違いだ』と宇野がどう話しても聞こうとはしませんでした」

「ふうん…」

「彼はその後も度々やって来ました、最初は脅迫して金銭でもと思っていたのですが、そうでなく本心そう信じ込んでいることに気づき、宇野は興味を持ったのです、出来るなら治療してやろうと思ったのでしょうか、しかし彼は、訪れる度に『いつか仕返しをしてやる』と言うばかりでした、私は『相手にしない方がいいのでは』と言っていたのですが…」

「どうして彼が宇野医師のところに来たのか、何か心当たりでも？」

「ありません、宇野が聞き出したところでは、彼の恋人が死んだと言うのは事実だったようです、誰か

に医療ミスだとでも吹き込まれたのでしょうが、それがなぜ宇野クリニックと言うことになるのか、宇野自身不思議がっていました、催眠療法の精神科で人命にかかわるような医療ミスなど起こりようがないものですから」
「なるほど、ところで貴女は離婚されていたのでしょう、どうしてそれを？」
「実は、籍は離婚のままですが一月程前から宇野のところへ戻っていたのです、そこで以前と同じように宇野を手伝っていましたので」
「そうですか、重要な情報をありがとうございました」

「やれやれ、これで事件は決着か」
「そうね、ほぼわかったわ、推理小説でよく言う、『ピースは全て嵌った：というところね、でも証拠

がない…」
「証拠だと？岩井は自分で『やった、やった』と言ってるんだ、自白と同じじゃないか、まあこの事件は裁判にはならないだろうが、被害者の身体にあった弾は、岩井の持っていた拳銃で使われるものだとわかっている、イチョウの根元にいるのを土手下から撃った、その際の発射角度も問題はない」
「そうなの…でも…」
「うん？何がおかしい？」
「動機がわかったと言っても、肝心なことがわからないじゃないの、なぜ岩井は宇野が医療ミス犯したと思ったのか」
「ううん、そうか…だが岩井の頭の歯車は狂ってるんだぜ」
「いくら狂っててても、何かがあるはずよ、二人の接点ね」

闇夜の公園、イチョウの立つ土手下に一人の影が現れた。
「おい、どこにいる！出て来い！」
影が叫ぶと同時に、イチョウの根元がポッと明るくなり、やがてそれは徐々に人の姿に変わる、白衣を着た医者の姿だ、
「な、何い！お、お前は？そ、そんな！」
影は白衣に向けて銃を発射した、と、その瞬間二人の違った影が現れ、すぐ銃を持つ影に襲いかかった。

「やはりね」
明かりを付けたのは夕子、彼女が照らした懐中電灯に浮かんだ男の顔は山脇医師、彼を押さえているのは原田と岸本、
「よし、連行しろ」
と命令したのは宇野だった。

いつもの喫茶店、ただし、今日は原田と岸本それに課長も同席している。
「どうもよくわからない、夕子君の口から直接聞きたいと思ってね」
これが課長が同席している理由だ。
「まだ推測の段階ね、山脇の取調べが進めば、はっきりしたことがわかると思うけど」
「推測でいい、頼む」
「あの二人の医師、宇野と山脇ね、友人と言ってたけど、本当は互いに相手を殺したいほど憎み合っていた、宇野は山脇に妻を取られた、山脇の方は、宇野に何かの秘密を握られていた、これは本当の医療ミスの証拠じゃないかしら、妻を取られた宇野は、仕返しとしてかなり陰湿な脅迫をしてたのだと思うわ」
「そうか、宇野の医院にいた山脇は、その証拠を探

してたんだな」
「そうだと思う、で、宇野のところへ岩井が現れた、ほら宇野の元妻、国東恭子ね、彼女なぜ岩井が現れたのかについて曖昧なことしか言わなかったじゃない、岩井が恋人の死を医療ミスだと思い込んでいたとしても、それがなぜ精神科になるの、恭子も言ってたけど、誰が考えてもおかしいじゃなにの、岩井は、自分がおかしいことを自覚していた、そのために治療を望んで精神科医を尋ねたのなら自然でしょ、彼は患者として宇野のところに現れたのよ。」
「そうか、それが岩井と宇野の接点だったのだな」
「ええ、最初は宇野も普通に治療しようとしたと思うわ、ところが岩井の思い込みと復讐心の強さに気づいた宇野は、これを利用しようとした、治療のふりをして逆さに煽ったのね、『仇を取らない限りおまえの頭脳は濁ったままだ、やれ、仇を取るんだ！

そうすればおまえは元に返れる、やつをやるんだ！アサシンになるんだ、おまえにはその腕があるはずだ、暗殺者だ、やつをやるんだ！』って具合に、催眠療法を使って岩井の頭に刷り込んだ、その最終目的は『やつこそ山脇だ』と言うことね、山脇の医療ミスと岩井とは無関係でもいいの、岩井が山脇を撃ってくれさえしたら、自分の手を汚さないで妻を奪った山脇を倒すことができる、薬を使ったかもわからないし、酒を勧めたのも宇野だと思うわ」

「ううん…なるほど」

「ところが山脇がそれを知った、たぶん国東恭子からよ、彼女は、宇野の持っている山脇の医療ミスの証拠を探すために宇野のところへ戻っていた、そこで宇野の計画に気づいたんでしょう、これを聞いた山脇は、彼もまた岩井を利用しようとした」

「そうか、それで？」

「山脇は、何かの口実をつけて宇野を呼び出した『夜でもよくわかるイチョウの木の下で会おう』とでも言ったんでしょう、そして彼は、イチョウの根元にやって来た宇野を、土手下から射殺した。
　続いて岩井がやって来る、『今日こそいいチャンスだ、やつだ！山脇だ！やつはイチョウのところへ来るはずだ』とでも言って、宇野をかたって呼び出したのよ、岩井は、イチョウの根元に現れた山脇を見て、疑うことも無く一発で射殺した、そして、『やった、やった』と公園を走り出た、ただし、本当にやったのは鏡に映った山脇の姿」
「そうか、夕子さんが仕掛けたのと同じですね」
と岸本
「そう、イチョウに立てかけた鏡に自分の姿を映す、本当の山脇は土手と同じ高さの脚立にでも立ってたのね、だから間に岩井が入っても邪魔にはならな

い、国東恭子も共犯ね、彼女が懐中電灯で山脇を照らす、すると暗闇の中でも鏡には山脇の姿が映る」
「そうか、岩井は鏡を撃って『やった』と思ったわけだな」
「そう、私の使った鏡は実家がガラス屋さんの大学の知人にもらったもの、山脇が撃ったのは、その鏡に映った絵の医師ね、これも絵のうまい友人に描いてもらってベニヤ板に貼り付けたものよ、それをプラカードのようにして恭一が持ち上げてるのを私が下から懐中電灯で照らしていたわけよ」
「なるほどな、それで宇野が原田と岸本をこっそり連れ出したわけか、三人で飲むつもりだなと思っていたのだが」
「課長それひどいですよ、『相手は銃を持ってるはず、気をつけて』と夕子さんに言われて、ずいぶん緊張していたのに」

「まあ怒るな原田、しかし四人ともよくやった」
「宇野の元奥さんの話を聞いててね、凡その筋書きは掴めたの、でも証拠は何も無い、だから山脇に銃を発射させたかったの、ほら同じ種類の銃で、同じ弾を使っても、弾をみればどの銃から発射したのかわかるのでしょう、被害者の体内にあった弾は、岩井と山脇のどっちの銃から出たものかわかるはず」
「その通りだ、しかし夕子君よく見破ったな、岩井が宇野を撃った、ただそれだけの単純な事件だと思われていたのに…どこかからそれを？」
「事件現場を見てね、三点ほど変なことに気づいたの、一つはガラスの破片、ほとんどが汚れてくもってるのに、嫌にピカピカ光るものがあったの、調べたら新しい鏡だったわ、それから被害者が持っていた懐中電灯が消されていたこと、あの電灯のスイッチはスライド式ね、ボタン式なら撃たれた瞬間力が

入ってＯＦＦになるかもわからないけど、あのスイッチは意識して操作しないとＯＦＦにならないはず、被害者が倒れながら、スイッチを操作するはずはないでしょ、それに彼はスイッチとは別のところを握り締めてたわ、そうすると消したのは岩井、で。何のために？となると岩井以外に誰かいたのでは と考えたの、消したのは山脇ね、岩井が来たとき草叢が光ってたらおかしいと思うでしょ。で、最後の一つは、ほら岩井が署に駆け込んで来たときの言葉よ、恭一覚えてる？」

「うん、『やった！やった！』とわめいていたが…」

「だめね、彼は『こうして懐中電灯を左手に持ってな、あいつバカだぜ、それがいい標的だ、だからな左胸をぶち抜いてやった！』と言ったのよ、でも被害者の宇野は懐中電灯を右手に握ってた」

今日は夕子と二人きりだ。
「山脇が自供を始めた、夕子の言った通り、宇野の体内にあった弾は、山脇の銃から発射されたものに間違いないと証明されたからな、ただ署はちょっと困っている」
「あら何を？」
「岩井のことだ、彼が犯人ならそれなりの施設で治療させることができる、彼の状態ではその方がいいのだが、銃の不法所持だけではそうはできないからな、どこか病院に入って治療してもらえと説得してるんだが…」
「そうか、あのおじさん…私が説得してみようかしら…」
「それだ、彼が駆け込んだとき夕子は『あら、アサシンのおじさん』と言ったな、あの時より前に彼に会ったことがあったのか？」

「あら、だいじな岩井の言葉忘れてたのに、私の言葉は覚えてたの？恭一！だから大好き！」
「こら、からかうな！」
「実はね、陽子という友人と会ってたの、その時よ『俺はアサシンだ』と言って」
「そうだったのか、陽子と言うのは？」
「私の幼馴染、中学まではいっしょだったのだけど高校からは別ね、彼女今イギリスにいるのだけど、ほら、行方不明だった私が無事だったと知って、わざわざ帰ってくれてたのよ」
「ふうん」
「私の両親が亡くなった時ね、彼女、本気になって心配してくれたの、励ましたり慰めたり、いろいろと手を尽くしてくれたわ、もし彼女がいなかったら、あの時、私は本当にグレていた…」
「ふうん、そんなだいじな友人がいたのか、しかし

夕子、おまえは本当に不思議だな」
「あら何、私が名探偵だということ、今頃になって気づいたと言うの？」
「いやそうじゃない、夕子は、あつかましくて、押し付けがましくて、ずうずうしくて、口が悪いのに不思議とみんなに好かれ、いつの間にかいい友人や知人をつくってしまう、犬上もそうだし、原田や課長までも」
「もう、いろいろ並べてくれたわね、その後は、そそっかしくて、おっちょこちょいでと続くのでしょう！でも恭一、一つ忘れていない？」
「うん、まだあったかな？」
「バカ、もうないわよ！それじゃなくて私にはね、いい友人や知人の他にいい恋人もいるの、ほら目の前の誰かさん」
「おい、照れるようなことを言うなよ」

「フフフ、私、欲しいものがあるのよねえ、今度の給料日の翌日、必ず空けておいて」

「……」

了

ここに登場する人名は全て架空のものです、万一同名の方がいても、何ら関係はありません。

贋作幽霊暗殺者

http://p.booklog.jp/book/85864

著者 : tontokaimo39
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/85864

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/85864

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ